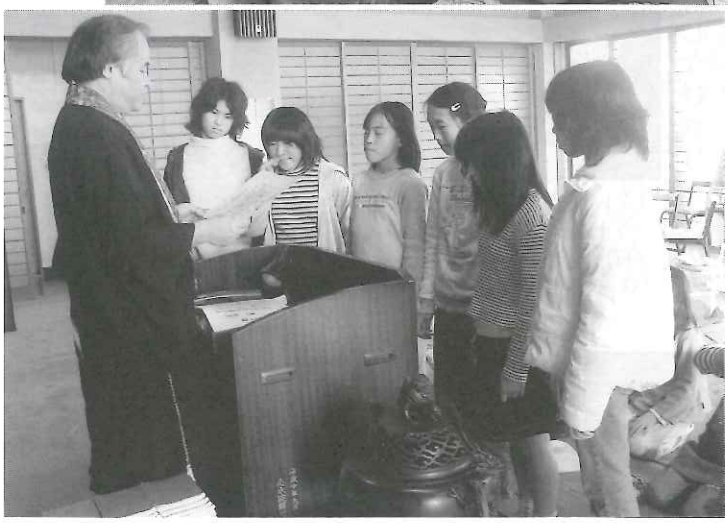
ようこそ

第　7　号
浄土真宗本願寺派
円　光　寺
〒870-0108
大分市三佐3-15-18
TEL097－527－6916
FAX097－527－6949

晴れやかに、ほとけの子。



（上）在校生（前列）と一緒に修了生のお友だち

（左）修了証授与
「これからも仏さまのみ教えを聞き、強く明るく生き抜いてください」

（3月15日・水曜学校修了式）

「また来てね。」

三月は卒業式のシーズンです。円光寺仏教こども会でも、水曜学校の修了式を三月十五日に行いました。

今年は六人の六年生が修了しました。うち三人は、一年生の時から六年間ずっと水曜学校に通ってくれました。お兄ちゃんお姉ちゃんと一緒に入校した子ども、お母さんも通っていた親子二代の水曜学校生もいます。

水曜学校を開設して二十六年が経ちます。その時々で子どもの顔ぶれは変わりますが、毎週水曜日の午後四時から一時間、おつとめ・仏さまのお話・ゲーム・お別れの時間のプログラムはずっと変わりません。

仏さまのご縁をいただくことの有り難さをあらためて思います。そして、そのご縁がつながり、広がっていくことのすばらしさを思います。そこに仏さまの大きな大きなおはたらきを感じます。どこまでもどこまでも「あなたといつも一緒だよ」とおはたらきくださる仏さまの頼もしさを心強く思います。

水曜学校は小学生で卒業ですが、中学生になっても大人になっても、私たちはずっと同じほとけの子です。「これからもお寺に来てね」と話したら、六年生の方から「十一月の子ども報恩講で、みんなで人形劇をするけん」と言ってくれました。本当に有り難いことです。

つながっている。つながっている。仏さまの尊いご縁をいただいて、私たちはこれからもずっとずっとつながっています。

これまでにも多くの子どもたちが水曜学校を巣立っていきました。「また来てね。」子どもたちが大きくなって、また帰ってくるのを楽しみに、これからも水曜学校を続けます。

おかげさまで、百号です!!

一九九八（平成十）年、蓮如上人五百回遠忌法要の年に、お寺の様子をご門徒皆さんに知ってほしいと『円光寺通信』の発行を一月より始めました。

爾来八年四ヵ月、毎月積み重ねて、この四月で百号になりました。よく続いたもんだと少し自慢したくなりますが、長続きの秘訣は自分の力を頼りにしないということでした。

実は、一九八四（昭和五十九）年に『円光寺報』第一号を発行しています。第十五号（平成六年八月）まで続きましたが、その時その時の極めて不定期なものでした。

（左）「円光寺通信」第1号（平成10年1月）
（右）前身の「円光寺報」第1号（昭和59年9月）
B4、2頁、タテ書きで、タイプライターを使っていました

毎月発行しなければと力が入り、原稿がなかなか書けず、その度々に発行が遅れ遅れになりました。自分の力を過信する、身のほど知らずとは、まさにこのことです。かえって皆さんにご迷惑をおかけしました。

さて再発行にあたって、まず紙面構成を決めました。今月の「行事案内」、先月の「寺録」、ご門徒の「おくやみ」、そしてご法話は大阪・津村別院発行の月刊誌『御堂さん』から「仏事の小箱」をいただいております。あとはトピックス記事です。パターンが決まると、編集が本当に楽になりました。

（左）昭然前住職の往生の様子と葬儀について報告と御礼（第24号、平成11年12月）
（右）晃照新住職継職法要の円成を伝える（第52号、平成14年4月）

そして、ご門徒皆さんの声が後押ししてくれます。特に「仏事の小箱」は日常生活の中で仏事を通して、お念仏の教えを平易な文章でわかりやすく解説してくれるもので、大変好評です。それから、よく読まれているのが「おくやみ」です。昔に比べて今は地域でのお付き合いが薄くなり、こうした悲報も人から人へ伝わるということが少なくなりました。お世話になったあの方、大切な人を偲ばせていただくご縁になっているようです。

長続きの原動力「仏事の小箱」これからもお世話になります

月参り通信もよろしく！

月参りの際に『月参り通信』をお届けしています。

お勤めの後、ゆっくりお話ができたらいいのですが、時にはお話もそこそこにすぐ失礼することもあります。そこで『本願寺新報』（西本願寺より月三回発行の新聞）の「みんなの法話」を切り抜いてお持ちしています。

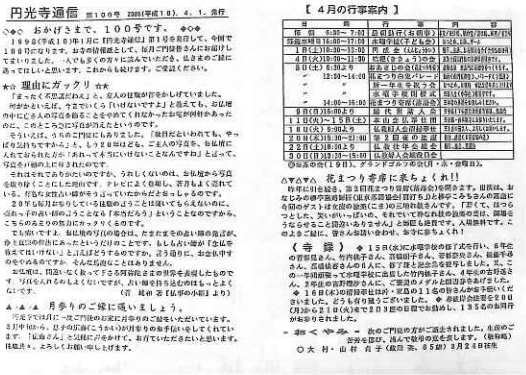
ご家族皆さんで読んでいただき、仏法を身近な生活の中でどうぞお味わいください。

月参り通信（平成18年2月）

記念の第百号

（平成18年4月1日発行）

これからも届くのが待ち遠しい、読んで楽しい紙面作りを心掛けていきたいと思います。



B4、2頁、ヨコ書きでワープロを使っています
（左頁）仏事の小箱（右頁）案内、寺録、おくやみ

お朝事『法話』より

NHK朝の連続テレビドラマ「風のハルカ」がいよいよ大詰めです。この半年の間、毎朝七時三十分から衛星放送を観て、月参りに出かけるのが私の日課になりました。

湯布院を舞台に、ハルカとその周囲の人々とのふれあいを通して、家族とは何かということを、考えさせられました。

大学三年の春休みに友だちと二人で、歩いて小田原から箱根を越え伊豆半島を縦断し、船で大島に渡る小旅行をしました。学生でお金もなく宿泊は全てユースホステルを利用しました。

川端康成の小説『伊豆の踊子』で有名な天城湯ヶ島に泊まった時のことです。宿泊所に着くなり「お帰りなさい」と大きな声で迎えられました。初めて来る所なのに「いらっしゃいだろ」と思いながら、馴れ馴れしく話しかけてくるおばさんに圧倒されました。「ここでは私があんたたちのお母さんだからね」と、言うことを聞かない私たちを叱ってもくれました。

でも何故か嬉しかった。何か我が家に帰って来たような、不思議なあったかい雰囲気を今でも思い出します。

さて、ドラマの中で観光事務所で働くハルカに、老舗旅館の主人が「おもてなし」の心を諭します。英語でホスピタリティ、歓待という意味で、旅に疲れた人を家族のようにあたたかく迎え入れるということです。

先日、隣町の青少年育成協議会が町角に「子どもたちが帰りたい家をつくろう」と、立て看を出していました。今、家族のあり方が問われています。一緒に食事をすることがない。挨拶さえも言葉を交わさない。家の中に子どもの居場所がなくなったと指摘されます。

私を待ってくれてる人がいる。いつも心配してくれている人がいる。たとえ遠く離れていても、確かに確かにつながっている。そこに家族がいる。私には帰るところがある。だから私は安心して、この人生行路を旅することができるのです。

阿弥陀さまが中心の私たちのお寺であり、お家です。お念仏につながった私たちは同じ家族です。「いつもあなたと一緒だよ」とおはたらきくださる、阿弥陀さまの大きな大きなお慈悲の中に、今日もまたお念仏申しつつお浄土への人生を旅してまいりましょう。（三月二十五日）

OBS（大分放送）ラジオで
仏さまのお話を聞きましょう
『西本願寺の時間』
毎週日曜　朝七時（10分間）

世々生々

ライブドア事件は私たちに大きな波紋をなげかけた。「お金さえあれば何でもできる」と公言してはばからなかった33歳の若者は、時代の寵児から一転、逮捕起訴され被告の身となった◆この一年半の間、常に話題の渦中にあり、テレビのバラエティ番組などでも持て囃された彼は、今、日本中から強烈なバッシングを受けている。彼の破天荒な言動に眉をひそめていた者は「それみたことか」と言い放った。世間の変わり身の早さに、そら恐ろしささえ感じる◆果たして彼のような人間は特異なのか。私たちの中にも「お金さえあれば」ということがないか。逆に「お金がないから幸せになれない」と。お金の大小がその人の人生を決めるなどとは思いたくない◆格差社会といわれる。勝ち組と負け組の二極化が進み、持てる者と持たざる者が顕著になるという。「お金がかかるから塾に行けない」と、経済的理由で教育にも格差が生じるという。親の経済力が子どもの人生を大きく左右する社会。何かおかしい。人生にはお金にかえられない本当に大切なものがある。生まれ難き人に生まれた意味を、今こそ仏法に聞かせていただこう。（住職）

お浄土への人生 シリーズ『同行さん』⑦

お講

春・秋の彼岸会と十一月の御正忌報恩講の年三回、お講といって参詣されたご門徒衆にお斎を差し上げます。

献立は昔から変わらず、その時々の旬の野菜で作る、けんちん汁に和えもの、そして漬物です。今は家庭で作ることが少なくなった、懐かしい味を楽しむことができ、喜ばれています。

お講当番の方には、朝早くから大変お世話になります。お寺の仏事は、ご門徒皆さんのご懇念でつとまります。会社勤めの方も多く、皆さん用事がある中を、お手伝いくださり、本当に有り難いことです。

お講当番がお寺参りの大きなご縁になります。仏さまのお慈悲の中に、共々に「おかげさま」と支え合う、先人が残してくれた大事なお寺の営みを、これからも大切にしていきたいと思います。

お講当番の皆さん、ありがとうございます（3月20日）

除夜会

12月31日から1月1日にかけ、除夜の鐘をついて新年を迎えました

参詣者に年越しそばをふるまいました

人生の節目〜にお念仏

結婚50年。金婚式を迎えました。

橋本利男さん、玲子さんに夫婦念珠を贈りました

昭和20年生まれの60歳、還暦です。新たな人生のスタートです。

（左から）若杉忠義さん、石口正三さん住職、石崎祐一さん、上野信子さん

『よろこび金庫』

喜びの浄財を次の方よりお寄せいただきました。誠にありがとうございました。（敬称略）

○工藤和子（孫の入学）

親鸞聖人祥月命日

常例法座の後、お参りの皆さん一緒にぜんざいをいただきました（1月16日）

あとがき

「王ジャパン世界一！」。野球の話題で久しぶりに日本中が沸き上がった。

決勝のキューバ戦。ちょうどお彼岸のお中日の法座に重なった。大分ではテレビ中継がなく参詣者にはさほど影響はなかったが、野球好きの私は終始経過が気になった。

小学校の通学路に魚屋さんがあった。秋の日本シリーズの頃、学校からの帰り、その魚屋さんに立ち寄るのが楽しみだった。「巨人、勝った？」挨拶そこそこに聞いた。スポーツ新聞を食い入るように読んだものだ。

わくわくする楽しみ。お寺参りが好きになればしめたもんだ。